

第3章 メサイア (救世主) 演奏会

昭和26年～62年12月 (1951～1987)

昭和26年12月、50回連続演奏を目指す「芸大メサイア」の公演が始まった。これは終戦後、朝日新聞厚生文化事業団が開始した福祉事業の一環として、年末の慈善演奏会が計画され、本学がこれに協賛しているものである。

ヘンデル自身、この作品を32回にわたりすべて慈善を目的として指揮したといわれ、「芸大メサイア」もこれに倣っている。昭和33年11月付で、当時の下総寛三音楽学部長から千代田税務署長にあてた証明誓約書には次のように記されている。「昭和33年12月20日 日比谷公会堂における朝日新聞東京厚生文化事業団主催のメサイア慈善音楽会の主旨に協賛いたし、これに出演する本校教職員学生はいっさい無報酬にて出演いたしますことを証明すると共に誓約いたします。」誓約書はまもなく廃止されたが、その精神は今日まで引き継がれている。

「芸大メサイア」は年末恒例の行事として定着している。ソリストは、はじめの数は教官が出演したが、その後、学部の4年生から希望者を募り、オーディションによって選ぶようになった。お馴染みのオーケストラとその時々の指揮者、そして毎年代わる新人を楽しみにしている固定ファンも多いようである。昭和34年5月11日、慰問演奏を行う目的で作られたわが国初の本格的なミュージック・カー「芸大メサイア号」が完成した。大型バスのような外観を呈し、側面のドアが広く開いて、中で演奏することが可能な車である。演奏者とオルガンを載せた「メサイア号」は、おもに年末に児童福祉施設や療養所などを巡回して演奏の贈物を届け、時には文房具や玩具、時には暖房器具などを積んで「走るサ

ンタクロス」として活躍した。昭和41年度末に老朽化のため廃車となるまで、「メサイア号」は、心の糧と生活必需品を送り続けたのである。

メサイアの演奏も昭和62年には第37回、本書が刊行される時点ですでに第42回を迎え、50回連続演奏の目標に近付きつつある。

なお、合唱、管弦楽、主催、協賛の四つの項目について以下に記し、個々のプログラムからは省く。

合 唱：東京芸術大学音楽学部学生

(昭和26年のみ東京芸術大学音楽学部・東京音楽学校学生・生徒となっている。)

管弦楽：東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

(昭和26年～昭和34年：東京芸術大学音楽学部管弦楽部、昭和35年～昭和39年：東京芸術大学音楽学部管弦楽部、昭和40年～：上記のように研究部となる。)

主 催：社会福祉法人朝日新聞東京厚生文化事業団

(昭和26年～昭和44年：朝日新聞厚生文化事業団、昭和45年に社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団と改称、昭和55年以降、現在の名称となる。)

協 賛：東京芸術大学音楽学部

第1回

日 時	昭和26年12月18日 (火) 午後6時
會 場	日 比 谷 公 会 堂
独 唱	ソプラノ 浅野千鶴子 アルト 四家文子 テノール 城多又兵衛 バス 矢田部勁吉
指 揮	金 子 登

孤児たちに楽しいクリスマスを……

氣の毒な境涯にある人達の慰問資金を造るため今後半世紀にわたり連続音楽会を行うことになりました。第一回演奏会は戦災孤児たちにクリスマスの贈物をするために開催いたします。

晩年を愛と慈善事業に捧げた偉大なヘンデルの聖譚曲中の最大傑作と稱される「救世主」演奏会に皆様の心からなる御賛同と御支援を切にお願い申上ます。

講 和 記 念

(社会事業資金募集)

半世紀連続演奏

演 奏 の 歡 び

東京芸術大学 音楽学部長 加藤 成之

此の度朝日新聞厚生事業団の企てに東京芸術大学音楽学部及東京音楽学校が参加してヘンデルのメシアを演奏する事になった。ヘンデルはこの曲を1741年8月22日から9月14日までの23日間に作曲したものと云はれている。この曲の初演はアイルランドのダブリンの音楽堂で慈善音楽会として1742年4月13日であつた。ロンドンで初演されたのは1743年3月23日にコベントガーデンで行われた。この時にはジョージ二世をはじめ満堂の聴衆は第二部のハレルヤの合唱に至つて感激の極に達して総起立したと云う。これがこの後の例となり、このハレルヤの合唱の演奏される時には起立して聴く習慣になつたと伝えられている。これ程この曲は堂々たるオラトリオである〔。〕ヘンデルはこの曲の初演が慈善音楽会であつたためであろうか一生の間30数回この曲を演奏したがその利益は慈善事業に寄附したという。この善行を我々藝大音校の職員・卒業生・学生・生徒も学びたく、この度朝日新聞厚生事業団の主催によつて演奏会を開催し、在京7千の孤児に収益を全部寄附することとなつたのは我々藝術にたずさわるものの幸といわなければならない。而してこのメシアは本年のみならず、毎年毎年くり返して演奏して社会奉仕をしたいと願つて居る。

孤児のために音楽会

芸術大と東京音校が中心 来月18日・日比谷で第一回

東京芸術大学と東京音楽学校が中心になって、戦災孤児たちのために今年から毎年音楽会を開くことになった。総収入を孤児に寄付するが、第一回は十二月十八日、日比谷公会堂で開かれヘンデル作「メシア」(救世主)を演奏する。

晩年盲目になったヘンデル(一六八五——一七五九)の名作「メシア」は社会事業とは深い縁がある。降誕、受難、復活の三部からなる大作は彼の一生に三十四回演奏されたが収益は全部、養育と慈善事業に寄付された。ロンドンで初めて上演された一七四三年、クライマックスのハレルヤで国王ジョージ二世は感激の極、起立し全聴衆も同じように歌い終るまで立ったまゝだったので以来、ハレルヤで起立するのが習慣となっている曲である。

両校では年間の最大行事としてこの音楽会をつづけるつもりで、今年の第一回にはベテランがそろって出演、独唱浅野千鶴子、四家文子、城多又兵衛、矢田部勁吉、管弦楽と合唱は芸大音楽部と音楽学校教官、学生と決定している。

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』昭和26年11月17日)

天声人語

このごろ何かにつけて金銭を与えることが流行っている。労力や知力の提供に対する報酬は当り前のことだが、広告費や宣伝費としてお金を与えようというのが最近の型である▶ミス何々で人集めて賞金を与える。ミス耳などというのまで出て、耳の形のよい女性に一万円をやる。ラジオの「私はだれでしょう」やクイズなども知的遊戯だが賞金が付きもので人気がある▶これらに応募している若い人たちの様子は真剣そのもので、いじらしいくらいだ。生活の世知辛さに、アメリカ流の現金主義が結びついたものだろう。現金な世の中になったものだ▶学生や会社員などのアマチュア合唱団でも、いざどこかへ出演となると無料ではいやだといって出演料

を要求したりする。みずからのために音楽を楽しみ、それが社会奉仕にもなれば満足だというような心が乏しくなった。何でもアルバイトかせぎなのである▶毎年クリスマスが近くなるとヘンデル作のメシア（救世主）が方々で競演されるのが例だ。それが今年は初めて孤児救済のために一本になり、二百六十余名の出演者が全部無料で奉仕することになったのは喜ばしい▶ヘンデル自身はメシアの演奏会を一生に三十四回やったが、その収益はみな養育慈善事業に寄進し、曲そのものの出版も営利に利用されるのをきらって彼の生存中は出版を厳禁したくらいだった▶十二月十八日の日比谷公会堂の演奏会には、東京芸術大学と東京音楽学校が中心となって教授も先輩も学生もみんな無料で出演して、一枚の招待券も出さず、一銭の経費差引もせずに、全収入を挙げて在京七千人の不幸な孤児にささげるそうだ▶その孤児たちの代表にも席を与えて、愛情の感動を直に味^{あじ}わせてやりたいものだ。

〔原資料縦組〕

（『朝日新聞』昭和26年11月26日）

美しい催し「救世主」演奏会

社会事業資金募集のために、ヘンデルの「救世主」が芸大音楽学部職員生徒達によって抜粋演奏された。企てはまことに結構である。今後五十年間続けるそうだからなおさら結構。

結構ではあるが、その皮切りの演奏としては必ずしも感心すべき出来ではない。二十四日間で作曲された作品のせいでもあるまいが、練習もかけ足ですまされたらしい。

四人の独唱者の声は、そぞろ年末を思わせるさびしさだが、比較的出来のよかったのは合唱だ。優れた合唱曲作家としての、ヘンデルの面影が一度うかがえるのはなにより。それにしても、第二部の「ハレルヤ」の合唱で、全聴衆を起立させるに値するほどではなかったようだ。

管弦楽も少々統一を欠いていたが、演奏の出来ばえは、ともかくとして、今回の美挙と出演者諸君の温い心とには、文句なしに敬意を表して置こう。（増沢健美）十八日＝日比谷公会堂

〔原資料縦組〕

（『朝日新聞』昭和26年12月19日）

第2回

日 時 昭和27年12月20日（土）午後2時

会 場 日 比 谷 公 会 堂

独 唱 ソプラノ 平 原 壽 恵 子

アルト 林 路 子

テナー 酒 井 弘

バ ス 秋 元 清 一

指 揮 渡 邊 曉 雄

宗教音楽会さかん

芸大の年間最大行事「メシア」など

十二月になると、毎年クリスマスを前に宗教音楽の演奏会がさかんに行われる。今年も、宗教音楽研究会のメンデルスゾーンのオラトリオ「エリア」（8日6時半、日比谷、独唱＝大熊文子、松内和子、木下保、新田宏一、合唱＝宗教音楽研究会、管弦楽＝東響、指揮＝遠山信二）東京芸大音楽学部のヘンデルのオラトリオ「メシア」（20日2時、日比谷、独唱＝平原寿恵子、林路子、酒井弘、秋元雅一朗、合唱と管弦楽＝同校合唱団、管弦楽団、指揮＝渡辺曉雄）KAY合唱団の「メシア」（28日6時、日比谷、独唱＝柴田喜代子、佐々木成子、柴田睦陸、新田宏一、管弦楽＝東京フィルハーモニー、指揮＝奥田耕夫）がある。

このなかで、芸大の「メシア」は同校が存続する限り続けようという同校年間の最大行事で、この曲の作曲者ヘンデルが一七四二年四月十三日、アイルランドのダブリンで初演してから、その一生の間、孤児の養育院のための慈善音楽会として演奏、この曲が営利のために利用されるのをきらって生存中出版を禁じたという精神に基づいて、同校でも全収益を孤児養育資金の寄付にしようという。〔後略〕

〔原資料縦組〕

（『朝日新聞』昭和27年12月18日）

第3回

昭和28年12月23日(水)

日比谷公会堂

独唱 ソプラノ 毛利順子
 アルト 中村浩子
 テナー 柴田睦陸
 バス 畑中良輔
 指揮 渡邊曉雄

神を賛う大コーラス 慈善「メサイア」演奏会

二百八十人のノドが全能の神を賛えて歌う壮大な「ハレルヤ・コーラス」に、三千の聴衆は感動の余り席から立ち上った……二十三日よる六時半から東京日比谷公会堂で開かれた東京芸大音楽部のヘンデル作「メサイア」(救世主)演奏会での一コマ。

本社厚生文化事業団主催のこの歳末慈善音楽会は、ヘンデルが生存中も慈善音楽会以外には演奏しなかったという精神を生かして芸大が五十年連続演奏の意気込みをこめたもので、今年は三回目。指揮の渡邊曉雄、独唱の毛利順子、中村浩子、柴田睦陸、畑中良輔氏をはじめ合唱団も管弦楽団もすべて無報酬で出演、収益は戦災孤児の歳末慰問に贈られる。〔後略〕

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』昭和28年12月24日)

第4回

昭和29年12月20日(月)〔午後6時半〕日比谷公会堂

昭和29年12月21日(火)〔午後6時〕横浜県立音楽堂

指揮……………山田和男
 ソプラノ……牧三都子 アルト……水野和子

テノール……石井昭彦 バス……大橋国一

この歌声、50年続けよと…

昨夜、ヘンデルの「救世主」演奏会

〇…東京芸術大学の音楽学部の教職員、学生が半世紀五十年の間、毎年必ず開こうと意気こんでいる「歳末慈善音楽会」—ヘンデル作「救世主」の演奏会が二十日夕六時半から東京日比谷公会堂で開かれた。今年は五十回のうちの四回目だ。

〇…三百人の合唱団が歌うハレルヤ・コーラス、管弦楽の指揮者は山田和男氏。三千人近い聴衆がクリスマスも間近い一夜を荘厳の気分ひたった。この収益はすべて朝日新聞厚生文化事業団を経て、戦災孤児その他の施設に、慈善資金として寄付される。

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』昭和29年12月21日)

荘厳と歓喜にふるえて

昨夜 横浜でメサイア演奏会

クリスマスも間近い二十一日夜東洋一を誇る横浜市紅葉ヶ丘の県立音楽堂はオーケストラに三百人の合唱が神をたたえて歌うハレルヤ・コーラスで宗教的感激にまき込まれた。本社厚生文化事業団が東京に引続いて神奈川県に贈る「歳末慈善音楽会」で、ヘンデル作の「メサイア(救世主)」が東京芸術大学音楽部のオーケストラと合唱団により山田和男氏の指揮で演奏されたのだった。

ヘンデル自身、作曲中「私は眼前に神の姿をみたと感じざるを得なかった」と述べているこの壮大なオラトリオは生存中も慈善音楽会以外に演奏されなかったといわれ、この会の収益金もすべて戦災孤児のクリスマス資金となるもの。

すでにさる十八日に入場券は全部売切れとあって会場は定刻の六時にはあふれるばかり、曲は救世主の降臨を切望する民衆のあこがれをうたう第一部ではじまった。ついで救世主の受難と復活の勝利をうたう第二部の最

後全能の神をたたえる「ハレルヤ・コーラス」の大合唱にもりあがると満堂の聴衆は総起立、荘厳と歓喜にふるえて感激は最高潮に達した。信仰と永遠の生命を賛美する第三部を聴き終った。

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』〔神奈川版〕昭和29年12月22日)

第5回

昭和30年12月20日午後6時 日比谷公会堂

12月21日午後6時 神奈川県立音楽堂

指揮……………渡 邊 暁 雄
ソプラノ……弓 削 睦 子 アルト……三 輪 洋 子
テノール……河 原 地 近 思 バ ス……栗 林 義 信

全聴衆が感激 横浜「メサイア」演奏会

東京芸大音楽部の慈善音楽会ヘンデル作曲「メサイア」の演奏会は二十一日午後六時から横浜市野毛山の県立音楽堂で行われた。これは朝日新聞厚生文化事業団が半世紀連続演奏を目指して去る二十六年から始めたもので、今年は五回目だが、本県での公演は二回目、定刻前には会場は通路までふさがり、なんとかきかせて欲しいと受付に訴える職場の合唱団員も少なくなかった。

演奏は渡辺暁雄氏の指揮ではじめられ弓削睦子(ソプラノ)三輪洋子(アルト)河原地近思(テノール)栗林義信(バス)の独唱と職員、学生の管絃楽(六十余人)大合唱(二百六十人)は会場に響きわたり“ハレルヤ、ハレルヤ全能の神統べ給う”の「ハレルヤ・コーラス」(第二部)では聴衆のすべてが起立して感激のうちにきくという盛況だった。

この「メサイア」を十六年前にノーカットで初演した鐺木欽作氏も姿をみせ「メサイアが全国津々浦々までひろがってその演奏が年末の行事にまてなったのは本当にうれしい。初演のころを思い出すと感無量です」と語った。

なおこの日の全収入は慈善事業に寄付される。

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』〔京浜版〕昭和30年12月22日)

二つの慈善音楽会 芸大の「メサイア」「新人推奨音楽会」

ヘンデルが生存中慈善音楽会以外には演奏しなかったという精神を生かして芸大が半世紀続けようという「メサイア」公演は、東京で五年目、横浜で二年目を迎えて出演者にも聴衆にもどうやら主旨が徹底したらしく、聴衆にあたってみたら一回も欠かさないで聴いているという人や、今後毎年つづけて聴くという人がだいたいた。

今年の独唱者は学生から選ばれた弓削睦子、三輪洋子、河原地近思、栗林義信の四人であったが、いずれも技術は別としてきどりや舞台づれがなく清潔な感じであった。宗教音楽は特別なふんいきがあるもので、技術以上に心持がモノをいう。初めての晴れの舞台だという真剣さがこの人たちの貴重なものになったのだろう。渡辺暁雄の指揮も前回にくらべてテンポに落ちつきを示し、合唱はますますうまくなった。それにしても聴衆の理解と協力を維持するには年毎の向上が望まれることを忘れないでほしい。—20日・日比谷公会堂、21日・神奈川県立音楽堂。〔後略〕(呂)

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』昭和30年12月22日)

第6回

昭和31年12月20日午後6時 日比谷公会堂

12月21日午後6時 神奈川県立音楽堂

指揮……………金 子 登
ソプラノ……松 本 弘 子 アルト……太 田 宏 子
テノール……河 原 地 近 思 バ ス……栗 林 義 信

*ヘンデル作「メサイア」について

野呂信次郎

切符奪い合いの「メサイア」

クリスマスをはかえて今年も慈善音楽会や宗教音楽演奏会がさかんだ。

まず東京芸大音楽部の合唱団と管弦楽団が半世紀続けると意気込んでい
る恒例のヘンデルの「メサイア」演奏会が東京（20日6時、日比谷公会
堂）と横浜（21日6時、県立音楽堂）で行われる。指揮者は五年ぶりにウ
ィーン留学から帰国した同大学助教授金子登が当り、独唱者は学生の中か
ら選ばれたソプラノ松本弘子（専攻科、浅野千鶴子門下）アルト太田宏子
（四年生、関種子門下）テノール河原地近思（四年生、渡辺高之助門下）
バリトン栗林義信（四年生、矢田部勁吉門下）の四人。

ヘンデルは「メサイア」を一七四二年四月十二日、アイルランドのダブ
リンで初演した時に、囚人と病院のための慈善音楽会として行ってから、
その生涯三十四回にのぼる公演をことごとく慈善音楽会としたほか、この
音楽が営利のために演奏されることをきらって楽譜の出版さえ禁じたとい
う。芸大ではこの精神を生かそうと、全収入を孤児の施設に寄付する。今
年は六年目であるが、理解者がふえて、芸大の定期演奏会は切符を売るの
に苦労するというのに「メサイア」の切符は奪いあいでも事務員が悲鳴をあ
げている始末。〔後略〕

〔原資料綴組〕

（『朝日新聞』昭和31年12月14日）

三百人の大合唱に酔う 横浜でメサイア演奏会

○…「ハレルヤ、ハレルヤ、全能の神統べ給う」と三百人の大合唱が県
立音楽堂を宗教的感激に包む、二十一日日本社厚生文化事業団が金子登指
揮、芸大生出演で贈る恒例のメサイア（救世主）の夕。

○…六時開演の一時前から観客が並ぶという盛況ぶりだったが、作者ヘ
ンデルが慈善音楽会以外には演奏させなかったという伝統をくみ、この日
の純益約二十五万円は社会事業に寄付されるという。

○…救世主の誕生を望む第一部、続いて第二部のその受難と復活をたたえ
るハレルヤコーラスに入ると、全員総立ちとなって耳を傾ける。こうして
第三部まで二時間半にわたる壮大なオラトリオが千三百人の観客を酔わせ
た。

〔原資料綴組〕

（『朝日新聞』昭和31年12月22日）

第7回

昭和32年12月20日午後6時 日比谷公会堂

12月21日午後6時 神奈川県立音楽堂

指揮……………金子登
ソプラノ……橘田恵美子 アルト……庭田紀子
テノール……有村祐輔 パス……箕輪久夫

第8回

昭和33年12月20日午後6時 日比谷公会堂

12月22日午後6時 神奈川県立音楽堂

指揮……………山田和男
ソプラノ……加藤綾子 アルト……成田絵智子
テノール……鈴木寛一 パス……三池三郎

芸大『メサイア号』 ASAHI MUSIC CAR

半世紀連続演奏の結晶 近く完成

東京芸大音楽学部が半世紀連続奉仕演奏の熱情が生んだ結晶である「芸
大メサイア号」が近く完成いたします。

東京、横浜におけるメサイア演奏による尊い純益金を基に造つたこの
日本最初の優秀な性能を備えたミュージックカーはやがて、人々の善意をの
せて東京都内をはじめ全国の恵まれない児童福祉施設その他を巡回して美
しい音楽による愛の慰問奉仕を芸大音楽部と協力して行う予定でありま
す。メサイア愛好の皆様へ厚く感謝いたす次第でございます。

朝日新聞厚生文化事業団
東京芸術大学音楽学部

歳末たすけあいへ

二つの学生音楽会

クリスマスを前に音楽学生の奉仕による「歳末たすけあい運動」基金募集の音楽会が二つ、二十日東京で行われた。〔中略〕

○…東京芸術大学音楽学部が半世紀連続の意気込みで行っているヘンデル作曲の「メサイア」——第八回演奏会もこの夜六時から日比谷公会堂で開かれた。三百人の合唱、管弦楽の荘重な響が場内いっばいにひろがって三千人近い聴衆を感動させた。

この二つの音楽会の収益はすべて朝日新聞厚生文化事業団を経て孤児その他の施設に寄付される。

〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』昭和33年12月21日〕

聴衆もハレルヤ・コーラスを合唱

昨夕、メサイヤ演奏会

昨夕六時から県立音楽堂で本社厚生文化事業団主催、東京芸大音楽学部協賛、年末恒例のヘンデル作曲「メサイヤ」の演奏会が催された。ハマでの「メサイヤ」演奏は今年で五回目。これからも毎年続け、六十回連続演奏が予定されているが、いずれも芸大の奉仕出演である。純益金は、スライドや小楽団の演奏もでき、巡回図書館も兼ねた大型自動車、芸大「メサイヤ号」の建造にあてられ、来春お目見えして福祉施設などを巡ることになっている。

京浜地区はもちろん遠く県下各地から集った千三百人の聴衆は、同曲第二部では全員起立してハレルヤ・コーラスを合唱、クリスマスを控えた一夜を感動深く過した。

〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』〔京浜版〕昭和33年12月23日〕

第9回

昭和34年12月20日（日）午後6時 日比谷公会堂

12月21日（月）午後6時 横浜県立音楽堂

指揮……………金子 登
ソプラノ……三 背 晶 子 アルト……佐 藤 澄 子
テノール……大 槻 秀 元 バ ス……原 田 茂 生

第九回を迎えて

ヘンデル「救世主」公演は第九回を迎えました。この公演は回を重ねるに従って、ますます意義深くなってまいり、喜ばしいことと思います。音楽に明け、音楽に暮れるわれわれは、一九五九年が暮れかかるにあたって、この聖譚曲を演奏することで、この年の民族の活動を思い天変と地異人々の身の上、やがてはわが生活を省みて、年末の感想を表明いたします。幸いに広くみなさまのご同調を得ることができ、朝日新聞社のご尽力の許、良き演奏会になることを期待致します。

昭和三十四年十二月二十日

東京芸術大学音楽学部長 田 尾 一 一

〔原資料縦組〕

芸大メサイア号（アサヒミュージック・カー）

東京芸術大学音楽学部が半世紀連続奉仕出演の熱情を傾けたヘンデル作曲「メサイア」演奏会は東京、横浜において毎年12月、開催いたしておりますが、本年は9回目を迎え、その尊い純益金を基にして、「芸大メサイア号」が本年5月完成いたしました。

日本最初の優秀な性能を備えた愛と善意の結晶であるメサイア号は作曲家ヘンデルの精神を生かして、全国の児童福祉施設その他を巡回して美しい音楽によって、愛の慰問奉仕に活動いたしております。ここにメサイア愛好の皆様へ厚く感謝いたします。

朝日新聞厚生文化事業団
東京芸術大学音楽学部

性 能

(1) 大 き さ 長さ8.5米, 高さ3.1米, 巾2.4米, 重さ約9トン

(2) 主なる性能

A) シャーシーはトヨタ自動車特別設計巾広スプリングとアンチロー, ダンパーの使用によって乗用車と同様なクッション。

B) ボディーは梁瀬自動車で建造, 音楽演奏と巡回図書館とをかねています。天井壁は厚い特殊断熱層と吸音板を使用し側面ステージでは講演, 紙芝居, スライド映写, 及び小楽団の演奏等ができ屋上は特別なフロー張りをして組立式のバックスクリーンを立てると25人位の管弦楽演奏並びに映画上映が可能。

C) 拡声装置は不二音響特製で巨大なスピーカーを設置しステレオ長時間録音機並びにワイヤレスマイクの使用と相まって完全立体音楽演奏ができましたオールトランジスターの小形スピーカーも前後に設置してあります。

D) 中央演奏室にはビクターの技術で世界で初めての試みである電気オルガン搭載が可能になり本格的な壮大な演奏をお贈りすることができま

聴衆もハレルヤ斉唱

年末恒例のメサイア演奏会

○…年末恒例の朝日新聞厚生文化事業団主催によるヘンデルのオラトリオ「メサイア」(救世主)の慈善演奏会が二十一日夕六時から県立音楽堂で開かれた。東京芸大音楽部の教官, 学生が奉仕出演の半世紀連続演奏計画によるもので, 横浜では今年で六回目。

○…金子登氏指揮のもと, 独唱者四人, 管弦楽五十人, 男声五十人, 女声八十人からなる大編成, 千五百の座席は満員, 補助イスも足りず, 立ったままの人も多く, 外人の家族連れが目立った。

○…第二部, 最後の「ハレルヤ」では聴衆も全員起立して斉唱, クリスマスに^{ママ}にひかえた一夜を深い宗教的感動のうちにすごした。〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』〔京浜版〕昭和34年12月22日)

第10回

昭和35年12月20日(火) 午後6時半 日比谷公会堂

12月21日(水) 午後6時半 横浜県立音楽堂

指揮……………渡 邊 暁 雄
ソプラノ……関 種 子 アルト……戸 田 敏 子
テノール……柴 田 睦 陸 バス……中 山 悌 一

*「メサイア」第10回公演に寄せて

野 呂 信 次 郎

「救世主」演奏第十回の歎び

昭和二十六年(一九五一年)の暮, 朝日新聞厚生文化事業団の催しに東京芸術大学音楽学部が参加してヘンデルの聖譚曲「救世主」を演奏して以来, 毎年の暮ごとに継続せられたこの演奏は十回目になります。

この聖譚曲は, ヘンデルが一七四一年作曲し, 翌年アイルランドのダブリンで演奏せられて以来ヘンデル在世中慈善音楽会として三十数回演奏され, その収益はすべて難民救済のために寄せられたと言います。その美しいヘンデルの志に沿ってわれわれ東京芸術大学音楽学部でも, 職員, 卒業生, 学生が力を協せて, 朝日新聞厚生文化事業団の主催のもとに, 毎歳暮に演奏して, その収益はすべて社会事業に寄せてきました。

幸いに演奏も年とともに充実して来ましたが, 他方聴衆の理解も高まってまいり, また運営にも熟練してきて, 年とともにヘンデルにならってという催しの意味が実現してくることは歎ばしいことであります。

殊に今年は第十回でありますので, われわれ関係者一同の感想は格別でありまして, 良き演奏会になることを期しております。

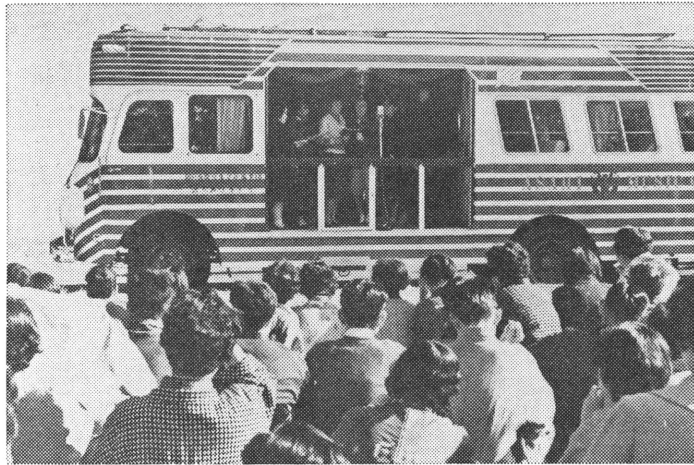
昭和三十五年十二月二十日

東京芸術大学音楽学部長 田 尾 一 一

〔原資料縦組〕

芸大メサイア号・音楽慰問に活躍

メサイア慈善演奏会の尊い純益金を中心として出来たメサイア号（アサヒミュージック・カー）は全国の児童福祉施設や療養所などを巡回して美しい音楽による愛の慰問奉仕に活動しております。



写真は国立村山療養所慰問の芸大音楽学部学生

今年でもう10回目

—慈善メサイア演奏会—

東京芸術大学音楽学部の教職員、学生が半世紀五十年間、一年も欠かさずに開こうと意気込んでいる歳末慈善のメサイア演奏会が二十日午後六時半から東京の日比谷公会堂で開かれた。作曲者ヘンデルの精神をくんで全員が無料出演収益は主催者の朝日新聞厚生文化事業団を通じて養護施設などに寄付するというこの演奏会、ことしは十回目。指揮者は渡辺暁雄氏、コーラス、管弦楽は同学部の教職員、学生、それに独唱者はことしは第一線声楽家の関種子、戸田敏子、柴田睦陸、中山悌一の諸氏が特別出演、お

ごそかなハレルヤコーラスで満員の聴衆を感動させた。第一部演奏のあと、十年間の努力を祝って朝日新聞東京本社木村編集局長から同大学田尾音楽学部長へ感謝状、施設の子たちを代表して東京都下の聖ジョセフ・ホームの女生徒が田尾部長、指揮者の渡辺氏に花束を贈呈、また緒方文部次官からも祝辞が寄せられた。

〔原資料縦組〕

（『朝日新聞』昭和35年12月21日）

聴衆うっとり 芸大横浜公演

歳末の年中行事になった東京芸大の「メサイア（救世主）」の第七回横浜公演が二十一日夜六時半から県立音楽堂で行なわれた。作曲者ヘンデルの遺志をいかそうと芸大音楽学部の学生と、卒業して一線に活躍する声楽家が無料出演し、収益は社会事業に使うもので、朝日新聞厚生文化事業団の主催、日本フィルの常任指揮者渡辺暁雄氏のタクトで、七十人のオーケストラ、関種子、戸田敏子、柴田睦陸、中山悌一ら四氏の独唱、百五十人の大合唱がキリスト生誕の喜びを歌い上げ、千三百人の聴衆を感動させた。

〔原資料縦組〕

（『朝日新聞』〔京浜版〕昭和35年12月22日）

第11回

昭和36年12月20日（水）午後6時半 新宿・厚生年金会館

12月21日（木）午後6時半 横浜県立音楽堂

指揮……………	金子登		
ソプラノ………	窪田江美子	アルト………	田中道子
テノール………	板橋勝	バス………	平野忠彦

第12回

昭和37年12月19日（水）午後6時半 上野・東京文化会館

12月20日（木）午後6時半 横浜・県立音楽堂

指揮……………渡 邊 暁 雄
 ソプラノ……小 津 ま す み ア ル ト……高 島 和 枝
 テノール……田 原 祥 一 郎 バ ス……持 田 篤

さかんな慈善演奏会

人気上々の芸大「メサイア」

◇歳末から年始にかけて、音楽家の奉仕による慈善音楽会が年々さかんになってきた。芸大の「メサイア」、武蔵野音大の「第九」をはじめ、どの音楽会も切符の売行きは上々。19日夜東京文化会館での芸大「メサイア」などは学生の間で切符のうばいあいという話もあり、「メサイア」をきかないと年が越せないという熱心なファンも出てきた。この「メサイア」は、ヘンデルが生涯慈善音楽会として演奏したが、ベートーベンの第七交響曲が傷病兵のための音楽会で初演され、またリストが故国ハンガリーの大洪水をきいて救済の音楽会を開いたことなど有名だ。外国では著名演奏家が慈善音楽会を行なっている例が多い。〔後略〕 〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』昭和37年12月16日〕

昨夜、「メサイア」慈善演奏会

年末恒例の朝日新聞厚生文化事業団主催、東京芸大音楽学部による第十二回「メサイア（救世主）」慈善演奏会が十九日午後六時半から上野の東京文化会館で開かれた。

今年は独唱のソプラノが小津ますみ、アルト高島和枝、テノール田原祥一郎、バス持田篤、それに同学部合唱団と管弦楽部で指揮は渡辺暁雄氏、クライマックスのハレルヤコーラスとともに聴衆全員が起立、会場はおごそかな空気に包まれた。 〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』昭和37年12月20日〕

第13回

昭和38年12月18日（水）午後6時半 日 比 谷 公 会 堂
 12月19日（木）午後6時半 東京文化会館大ホール

指揮……………エーリヒ・ベルケ
 ソプラノ……貴 島 百 子 ア ル ト……矢 野 恵 子
 テノール……鈴 木 仁 バ ス……高 橋 修 一

第十三回ヘンデル「救世主」演奏にあたり

朝日新聞厚生文化事業団の主催で、毎年十二月末、東京芸術大学音楽学部は、ヘンデル「救世主」を演奏して、今回で十三回になりました。半世紀連続演奏と云うことで始められたそうですが、学部では、出来るだけ続けたいと思っています。

御承知のように、この曲は、作曲者ヘンデルの音楽によって人々を慰め、力づけようとの意を汲み、慈善演奏会として、本学教官学生一同無報酬で、快く出演し、朝日新聞もその収益をすべて社会事業に寄せてきました。

幸いに演奏も年とともに充実し、聴衆の方々の深い御理解のもとに、毎年の演奏会は、いつも座席を余すことなく盛会のうちに終始することが出来ますことは、音楽にたずさわる者として、この上ない感激と歓びを感じるのであります。

昭和三十八年十二月十八日

東京芸術大学音楽学部長 福 井 直 俊

〔原資料縦組〕

第14回

昭和39年12月18日（金）午後6時半 日 比 谷 公 会 堂
 12月19日（土）午後6時半 東京文化会館大ホール

指揮……………ニコラ・ルッチ
 ソプラノ……竹 林 澄 代 ア ル ト……辛 島 節 子

テノール……稲 田 浩 パ ス……工 藤 博

メサイア・ファンの声

カレンダーが最後の一枚になると共に「メサイア」の時期が訪れ、そして私は欠かさず演奏会でたましいの安らぎを得ています。はじめの頃は楽譜を持ちこんで自分なりに参加していましたが、この頃は静かに目を閉じて、心からその感激にひたることに満足を感じています。

芸大の「メサイア」を聞かないとクリスマスを迎えた気にならないのがいつわらざる心境なのです。生命ある限り聞き続けることでしょう。

(新宿区百人町四丁目RA44・金子 光)

私は第一回からこの演奏会を聞いております。あれは19歳の時で友達3人で日比谷公会堂の最前列の席で聞き、はじめて大いなるメサイアに感動しました。とくに最後のアーメンコーラスでは涙が出たものです。あれ以来、入場券やプログラムを大切に保存しており、出来れば50回連続を目ざしております。

そして私はこれまで無事に意義あるメサイア演奏を聞くことが出来ることに感謝いたしております。芸大の先生方もどうぞお元気で演奏を続けて下さい。

(渋谷区景丘町19・広瀬辰雄)

第15回

昭和40年12月18日(土)午後6時半 日 比 谷 公 会 堂

12月19日(日)午後6時半 東京文化会館大ホール

指 揮……………金 子 登
ソプラノ……林 康 子 ア ル ト……三 輪 敦 子
テノール……江 口 正 之 パ ス……移 川 澄 也

メサイア・ファンの声

このメサイアの演奏をきいて、やがてクリスマスを迎えるというのが、多年わが家のならわしになっている。歳末助けあい運動がはじめられ、クリスマス・シーズンともなると、おのずとメサイアにおもいをかりたえられる。私たちにとって、メサイアへのおもいは、たんなる反芻ではなくて、現前に具象をとまなう再体験として、魂をゆさぶるものなのである。人間と、人間の行為、思考が断片化し、時間が無内容になってゆく傾向の強い現代において、メサイアをきくことは、それによって、人間と、時間と、空間との恒常性をささえるよすがとしての意味が感じとられるからでもある。人間のこころをなごましめるもの、生きることのきびしさと、よろこびにいのちの躍動を覚えしめるもの、それはメサイアのもつ「とき」と「ところ」を超えた偉大な力につながるものにほかならない。朝日と芸大は、すくなくとも半世紀にわたって、この演奏会を続けるという。私どももまた、生きる日のかぎり、欠かすことなく、毎年これをきくよろこびをもちたいと願っている。(東京都世田谷区 谷川貞夫 大学教授)

今年もまたメサイアを聴くことができる。そう思うと私の胸はずんできます。メサイアは私たちの心から失われかけている大切なものを呼びもどし、豊かな、清らかな流れとなって私たちを包み、うるおしてくれます。ちまたの騒音の中では決して思いだせないあのクリスマスのひびきをここに聞くことができます。日本のもっと多くの友がメサイアを愛するようになることを切に願うものです。

(横浜市磯子区 植松信雄 会社員)

年の暮のあわただしいなかにあって、しずかに流れる「メサイア」の演奏をきくとき、誰しも心にしずけさと、我にかえる大切なひとときを与えられることでしょう。これから門出される芸術大学の若い人たちによって演奏される「メサイア」は大いなる神の栄光をあらわすにふさわしく、年ごとに新たな感激をもたらします。メサイアを通じての熱情をもっていつまでもおつづけ下さいますよう心から祈っております。

(東京都文京区 大塚憲子)

〔ママ〕
壮巖に暮れのメサイア

芸大生が慈善公演

東京芸術大学音楽学部によるヘンデルの「メサイア」演奏会が、十八日午後六時半から東京・日比谷公会堂で開かれた。

作曲者自身が慈善音楽会のためにたびたび指揮をしたといわれるこの曲が、歳末助け合い運動の一つとして朝日新聞厚生文化事業団の主催で「半世紀連続演奏」として始められてから、早くも十五回目。すっかり歳末の恒例の行事となり「芸大のメサイアを聞かないと師走の気分が出ない」という熱心なファン二千余人が会場を埋めた。

金子登氏の指揮で熱のこもった演奏二時間余。壮巖な「ハレルヤ・コーラス」では聴衆も全員起立して合唱した。

この慈善演奏会の純益は恵まれない人々の援護にあてられる。

〔原資料縦組〕

〔『朝日新聞』昭和40年12月19日〕

第16回

昭和41年12月18日（日）午後6時半 日比谷公会堂

12月19日（月）午後6時半 東京文化会館大ホール

指揮……………フリッツ・マーラー
ソプラノ……大川 隆 子 アルト……伊 原 直 子
テノール……長 谷 川 敏 バ ス……野 沢 武

メサイア・ファンの声

荒野に泉が湧くように、戦後の荒廃に注いだ一条の流れは、いますべての人びとの心をうるおし、励まし、大河となって行く。メサイア・ファンもまた、共にその労苦にあづかることの出来る1人として、その流れに加わることが出来るのは大きな喜びである[。]“喜び”の共感こそ何にもまし

て「救主降誕」の響きではなかるうか。“わが心とわが身は生ける神に向って喜び歌います”（詩篇84）

芸大諸姉妹の健闘を祈りつつ1ファンの感謝と喜びを伝えます。

（日本キリスト教団本郷中央教会 林田秀彦 牧師）

年の瀬とともに芸大音楽学部の「メサイア」が来る。はや16回を数えることになったこの演奏会も、私にはすっかり馴染みの深いものになった。この学生中心の若い歌声は、理になく美しい。毎年のこととは言え、芸の道を志す人たちの「メサイア」は、そして半世紀連続奉仕の「念」の響きは、私を惹きつける。

教職員、学生は勿論のこと、関係者のご苦勞にハレルヤ。差当ってこの半世紀間を、歌い続けてほしいものです。

（東京都新宿区 斉藤弥三郎 ピアノ教師）

ヘンデルのメサイアが、わたくしたちのこころをとらえる魅力は、いったいどこにあるのでしょうか。それは無限につながるものだからでありましょう。

すくなくとも、その1つは、わたくしどもに、苦悩にたえて上を仰ぎみる祈念と、純真なものへの愛のまなざしを、よみがえらせてくれるからにほかなりません。

人生の光りと平安とを、力強くゆたかにあたえてくれるメサイアこそは、不信と不安にみちた時代に生活するものに対して、いつも、ふさわしい瞬間に、ふさわしい呼びかけをしてくれる永遠のいのちの声なのです。

些細なことにも動揺しがちな現代人に対して、きよらかなおもと、魂のやすらぎをもたらししてくれるもの、それがメサイアに秘められたよびかけだと思います。

聴衆のたましいをゆさぶるハレルヤ・コーラスに、敬虔なおもいをこめて、わたくしもまた、ひそかに、こころの声をあわせたいと願っています。

（東京都世田谷区 谷川ふじ子 主婦）

第17回

昭和42年12月17日（日）午後6時半 東京文化会館

12月18日（月）午後6時半 日比谷公会堂

指揮……………金子 登
ソプラノ……林 康子 アルト……高 橋 恵
テノール……入 江 進 バ ス……工 藤 博

メサイア・ファンの声

師走の雑踏の中にはいると、毎年、“ああメサイアが近づいたナ”とそんな感じがいたします。この演奏会を開きはじめて7年目をむかえますが、毎回新鮮な感動をうけ、新しい年への喜びと輝きを与えてくれる様な気持ちになります。このようなすばらしい、心暖まる演奏会を私はこれからも、毎年新しい感激をもって聞く事ができると楽しみにしております。芸大の諸先生ならびに学生の皆さまのご発展をお祈り申し上げます。

（武蔵野市 服部紀子 会社員）

私は終戦後まもなく、KAYのコーラスを中心にしたメサイア演奏を開きはじめてから昨年まで、ほとんどかかさずに聞いている。キリストの栄光をうたったこのヘンデルのメサイアを聞くうちに、私は何かしみじみとした気持になる。ことし1年にあった事を思い出し、そして無事にすぎたことを深く神に感謝する気持がひしひしとわいてくるのでした。20年近くも続けて聞いたメサイアにいくつかのエピソードがある。終戦後まもないある冬、暖房もなにもない日比谷音楽堂での演奏のとき、第三部がはじまったころ突然、全館停電となった。なかなかつかないので演奏を続けることはできなくなった。その時ステージのコーラス隊の人々が、手に手にキャンドルをもって、静かにクリスマス・キャロルをうたいだした。しだいにそれは全館へとひろがり大合唱となった。メサイアは中止になったけれど、あのときの感動はいまも忘れない。終戦後の混乱の中の救いであっ

た。それからいつからか芸大のメサイアを聞くようになり、そのしんけんな演奏でうたれた。また3年前、ニューヨークのカーネギ[一]ホールでのメサイアを聞いた。日本とはまったく違うはなやかなふんいきであったが、私はやはりしみじみと感謝する気持ちにひたった。

（常葉恵子 聖路加国際病院看護婦）

静かな祈りの中に秘められた力強く荘厳な真実の美の響きをもって、神を称える芸大音楽学部の「メサイア」は激しく私の魂をゆさぶり魅了させました。そしていつしかその熱烈な1ファンとなっておりました。「メサイア」は、苦悩や不安の多いこの世に、素晴らしい永遠の光と平安とを与えてくれるものであると思います。またすべての人の心に、真実なる愛の美しさと喜びを感じさせるものであると思います。天に繋がる若い学生諸君の「世に栄光あれ」との魂をこめた響きは、人をして強く感動させるものがあります。厳しく芸道に徹し、たゆまざる努力のもとに歌い続け、世に奉仕する関係者の皆様のご苦勞に心から感謝いたします。

（東京都板橋区 原口正次 高校教師）

フィレンツェのミケランジェロは、カペラ・システィナの天井に4年余りの歳月を費やして、「天地及び人類創造」の絵を描き、その絵を通して法王に神を告知している。又一方、ヘンデルは驚くばかりの短い期間で「メサイア」を書上げ、これを演奏してとうとう国王を起立させている。神を芸術の角度から探求し、かつ書き、かつ奏して、神の姿を見んと試みたるは、僧侶不信であったかどうかかわからぬが、神を見んとする或る踏み台の一角が空席であったことは確かである。今宵また若い芸術家達が神の世界を奏でる。こうしてメサイアを聴く喜びと、歌い叫ぶことのできる芸大諸姉兄への羨望とが交差して、不思議な誘惑感を醸し出す。この響きは、耳をもたぬ人にも響き渡り、目をもたぬ人にも映りいくものであり、おおよそ地の果てまで響き渡るものである。歌うと言うことは「生きる」ことの第一義に違いない。芸大の諸姉兄、教職員、それに蔭でのご苦勞を受もった方、今宵栄光あらんことを。（小田原市 川之内弥太郎 会社員）

第18回

昭和43年12月14日(土) 午後6時半 日比谷公会堂

12月15日(日) 午後6時半 東京文化会館

指揮……………ワルター・ダイレ
 ソプラノ……斉藤昌子 アルト……戸嶋由美
 テノール……宮崎義昭 バス……岩阪憲和

メサイア・ファンの声

枯葉が冷たい風にさらさら舞うころ、いつもきまってまたメサイアが聴けるなと感じます。私が聴き始めてから、学生時代、B・G生活、主婦と生活環境は変わりましたが、いつになっても変ることのないのは十二月になるとメサイアがあるということです。演奏の後半にあるハレルヤコーラスになると、昔、イギリス国王ジョージ二世が感激のあまり立ち上がった気持がわかります。アーメンコーラスになると、私はいつも今年の反省をし、また来年により大きな期待と望みを願うのです。そして何かはればれとした気持で会場を後にします。(相模原市 志村須美 主婦)

2年ほど前になろうか、私は、一人娘を交通事故で失った人を知った。彼女は私の父の昔の教え子であった。悲しみに打ちひしがれた手紙を読んだとき、私にできることは、良い音楽会にでも誘うことぐらいだと思った。そしてその年の暮にメサイアの切符を贈った。メサイアは私の一番好きな欠かしたことの無い音楽会である。

悲しみの中のみ生きてきた彼女にとってメサイアは、想像に絶する程の偉大な世界であったという。私にとっても、また、心の底から感動し、あわただしく忙がしい環境にありながら、崇高な気分に入ることのできるひとときなのである。(東京都世田谷区 茂手木節子 音大講師)

暮にはメサイアを聴きクリスマスを祝うことが私の生活に深く根ざして

います。メサイアを聴く日をいつも楽しみに待っています。芸大の人たちによって荘重に演奏されるメサイアは神の栄光をあらわし、我らに心の豊かさや静けさを与え、意義あるひとときをも与えてくれます。この音楽会だけは多くの人に呼びかけて共にすばらしいひとときを過します。音楽会が終り帰宅の途中友と目を細め微笑を含んだ顔を合わせると、ますます心が豊かになっていきます。芸大がいつまでも演奏会を続け我らにこれを聴く喜びを与えてくれるようお願いものです。(横浜市 小倉喜八郎)

第19回

昭和44年12月13日(土) 午後6時半 愛知文化講堂

12月21日(日) 午後6時半 東京文化会館

12月22日(月) 午後6時半 文京公会堂

指揮……………金子登
 ソプラノ……丸山恵美子 アルト……中村妙
 テノール……若本明志 バス……斎求

* ごあいさつ

朝日新聞厚生文化事業団

* ヘンデル「メサイア」はじめての名古屋公演にあたって

東京芸術大学音楽学部長 福井直俊

メサイア・ファンの声

学生時代、日比谷でオーパーの襟を立てながら第1回を聴いて以来、とうとう今年で19回皆勤となりました。忙しい仕事の合間をぬい「メサイア」にかけつけるのはなかなか大変ですが、1年間音楽を聴いたしめくりとして、私には何にも代え難い年中行事となっています。騒々しい年の瀬にこの「メサイア」に集まり、1年を顧み祈りを捧げるファンがふえているのは本当に良いことです。私も芸大とともに半世紀通いつづけることでしよう。(東京都文京区 西山精一 銀行支店長)

十二月はメサイアの季節である。私の学生時代は合唱の時間は月、木曜の朝で、よく上野公園を駆けて行った。第一ホールの狭いベンチに折り重なるように腰かけて、練習が始まる。一年生は夢中に、四年生は幾分気楽に。芸大で私は、合唱を歌う豊かな幸せを得たが、わけても在学中四回のメサイアは、かけがえのない宝ものの思い出である。その懐しい曲を私は今年初めて、客席で聴く。多分嬉しさの余り一緒に歌ってしまうだろう。

(埼玉県鴻巣市 松谷二葉 芸大卒業生)

第20回

昭和45年12月14日(月)・15日(水) 午後6時半 日比谷公会堂

指揮……………エルビン・ボルン
ソプラノ……牧 野 美紀子 アルト……橋 本 多美子
テノール……保 坂 博 光 バ ス……貴 堂 義 晴

第二十回ヘンデル「メサイア」演奏にあたり

社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団の主催で、毎年十二月に開かれる慈善音楽会に、東京芸術大学音楽学部は、ヘンデルのメサイアを演奏して、今回で二十回になりました。半世紀連続演奏と云うことで始められたこの音楽会も、はやくも三分の一を終えることができました。しかし音楽学部では、できるだけ続けたいと思っております。

ヘンデルはこの曲を一七四一年に作曲し、一七四二年四月十三日、アイルランドのダブリンの音楽堂で、慈善音楽会として初演されました。本学も作曲者ヘンデルの、音楽によって、人々を慰め、力づけようとの意を汲み、慈善演奏会として、教職員、学生一同は快く協力出演し、主催者はその収益を、すべて社会事業に寄せています。

幸いに演奏も年とともに充実し、聴衆の方々の深いご理解のもとに、毎年演奏会は、いつも座席を余すことなく盛会のうちに終始することが出来ますことは、音楽にたずさわる者として、この上ない感激と歓びを感じるものであります。

昭和四十五年十二月十四日

東京芸術大学音楽学部長 池 内 友 次 郎

〔原資料綴組〕

メサイア・ファンの声

10代の少年だった私が、木枯しふく夜、メサイアで大きな感激をうけた。そして20年。今では2人の子供の父親となり、生活環境が変わっても毎年メサイアを聴く日を楽しみに。今年の反省、来年への大きな期待をあたえてくれるこの音楽会が私の生活の一部分となっている。大いなるメサイアと共に過せる豊かな喜びをいつまでもつづくように、東京芸大の人たちの努力をお願いしたい。感謝。 (東京都渋谷区 広瀬辰雄 会社員)

私は東京へ移ってきて12年になったが、毎年かならず東京芸大演奏の「メサイア」を聴いてきた。メサイアを聴いてクリスマスをしみじみと味わうのである。どんなに多忙でも、どんなに疲れることがあっても、メサイアを聴くと元気が出てくるし、楽しくなるのであるからふしぎである。いつもほぼ1年がかりで予定したり計画したりして出かけるのであるが、それだけのことがあるのだからふしぎである。

(東京都目黒区 高橋昭二 牧師)

第21回

昭和46年12月18日(土) 日比谷公会堂・19日(日) 東京文化会館

指揮・チェンバロ……………山 田 一 雄
ソプラノ……斉 藤 昌 子 アルト……梶 井 裕 子
テノール……吉 田 征 夫 バ ス……山 本 隆 則

第22回

昭和47年12月16日(土) 日比谷公会堂・17日(日) 東京文化会館

指揮……………金 子 登

田部勁吉の先輩教官方が率先して協力され、2回、3回と教官による独唱者で演奏されて来ましたが、其後は大学4年生の希望者の中からオーディションによって決めようということになり、声楽部教官と指揮者で決定する仕組みになりました（但し第10回目は教官独唱者）。

メサイアも回を重ねるごとに、情熱をかたむけられた先輩の諸先生方は退官され、発足当時を知る私共が古参格となって参りましたが、私も出演当時は振りかえり演奏会が終ってこれで $\frac{1}{50}$ の責任を果すことが出来たのだという喜びと感激は今もって忘れることが出来ません。また昭和34年には福祉施設と療養施設の慰問のために、電子オルガンとステレオ装置を備えた移動音楽車「芸大メサイア号」が完成し、そのバスが芸大の構内に入ってきた時の感激はひとしおで、音楽学部挙げて拍手で迎えました。今ではこのバスはすでにないとのことですが活躍当時をおもい第2、第3の「芸大メサイア号」が活躍することを期待しております。

このように芸術大学では教職員・学生挙げての年中行事として協力出演しており、このことは音楽にたずさわる者のほこりとさえ思っております。幸いに演奏会が関係者すべての協力によって年々盛会裡に終了出来ますことはこの上ない喜びであります。そして半世紀といわず芸術大学の続くかぎりこの行事の続けられることを切望して止みません。

皆様の御健闘をお祈り致します。

東京芸術大学教授 酒 井 弘

第26回

昭和51年12月16日（木） 東京文化会館

指 揮……………金 子 登
ソプラノ……渡 辺 恵 子 アルト……天 田 美佐子
テノール……市 原 太 郎 バ ス……黒 崎 鍊太郎
（トランペット 奥野 敬）

第27回

昭和52年12月19日（月） 東京文化会館

指 揮……………エルビン・ボルン
ソプラノ……柳 下 裕 子 アルト……町 村 ひろ子
テノール……石 井 健 三 バ ス……野 田 廣 志
（トランペット 坂 井 俊 博）

第28回

昭和53年12月11日（月）・12日（火） 東京カテドラル聖マリア大聖堂

指 揮……………金 子 登
ソプラノ……今 関 智 子 アルト……浜 田 りり子
テノール……横 山 和 彦 バ ス……山 田 健
（トランペット 坂 井 俊 博）

第28回ヘンデル「メサイア」演奏にあたり

社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団の主催で、毎年十二月に開かれる慈善音楽会に、東京芸術大学音楽学部は、ヘンデルのメサイアを演奏して、今回で二十八回になりました。半世紀連続演奏と云うことで始められたこの音楽会を、音楽学部では、これからもできるだけ続けたいと思っております。

ヘンデルはこの曲を一七四一年に作曲し、一七四二年四月十三日、アイerlandのダブリンの音楽堂で、慈善音楽会として初演されました。本学も作曲者ヘンデルの、音楽によって、人々を慰め、力づけようとの意を汲み、慈善演奏会として、教職員、学生一同は快く協力出演し、主催者はその収益を、すべて社会事業に寄せています。

幸いに演奏も年とともに充実し、聴衆の方々の深いご理解のもとに、毎年演奏会は、いつも盛会のうちに終始することが出来ますことは、音楽

にたずさわる者として、この上ない感激と歓びを感じずるものであります。

昭和五十三年十二月十一日

東京芸術大学音楽学部長 浜 野 政 雄

[原資料縦組]

第29回

昭和54年12月15日（土） 上野・東京文化会館大ホール

指 揮……………マルティン・メルツァー
ソプラノ……平 松 英 子 アルト……市 川 澄 子
テノール……永 田 峰 雄 バ ス……戸 山 俊 樹
(トランペット 田 中 昭)

第30回

昭和55年12月17日（水） 上野・東京文化会館大ホール

指 揮……………マルティン・メルツァー
ソプラノ……大 塚 由 乙 アルト……山 岸 美保子
テノール……関 根 宣 義 バ ス……渡 辺 隆 一
(トランペット 川 上 耕 作)

〈オーケストラの一員として〉

今回でメサイアの公演は30回になりますが、めざす半世紀50回連続演奏を人の一生にたとえれば、青春期は過ぎて円熟した壮年期に入ったところ です。初回の昭和26年といえは第2次大戦で日本は敗戦の苦悩がまだ抜け ならず、人心荒廃の世相に満ちていたときでした。朝日新聞厚生文化事業 団では、音楽を通じて人びとの心をなごませ新しい勇気を人びとに与え、 また本当に困っている人たちの福祉のために、何かよい企画を、と芸大に 相談にこられました。関係の方がたと相談のうえ、ヘンデルの「メサイ

ア」を慈善公演として、おたがいに協力し合いながら続けようときまりま した。これはまことに「天のひらめき」といってもよいと思います。

はじめのころは芸大の先生方が独唱のパートに出演されていましたが、 声楽科の学生のなかから優秀なソリストを、オーディションにより選んで 出演させた方が教育面でもプラスになるのではないかと、との意見がでて、 第4回目ぐらいからは、学生がソロのパートを歌っています。当時、ソロ を歌った学生で、いまでは一流の演奏家になった方も多数おられます。

朝日新聞に集った浄財は、毎年、多くの困っておられる方がたをご援助 していると聞いています。私は第1回より芸大オーケストラの一員として 演奏させていただき、毎回演奏のすむごとに心清まる満足感を味わってき ました。来年、定年を迎える私は芸大を去っても、この素晴らしい「メサ イア」の音楽を年の瀬にいつまでも聴けるのを楽しみにしています。

東京芸術大学教授 岩崎吉三

〈メサイア・ファンの声〉

■友と聴くよろこび

11月の声をきくと、「メサイア」の切符の申し込みをしなければ、とい う思いが湧き、前売所へダイヤルする。ことしは30回目を迎えるという芸 大のメサイア。私には、欠かさず聴きだしてから26回になります。いつも 親しい友といっしょに聴くことができる喜びと、湧きでる感謝の気持ちと で新鮮な感動にうたれます。そして、「来年もきっと」と、かたく友と誓 う。

(渡辺紀子 横浜市・公務員)

■メサイア通い30年

私の「メサイア通い」も、とうとう30回になった。昭和26年の暮、暖房 もきかぬ日比谷公会堂で「ハレルヤ」の歌声がなり響いてから30年。年末 の「第9」騒ぎのなかで、この芸大の熱意あふれる半世紀をめざす慈善公 演こそ、ヘンデルの遺志を生かした世界にも稀な快挙であり、その汚れな き善意が多くのファンを惹きつけてきたのである。

私も学生時代から、社会人となり、家庭をもち、齢も50を越えた。毎年、メサイアの会場で1年を顧りみ、祈りを捧げるのを常としてきた。これから20年、70歳になるまで、年と共に感慨を深めながら通い続けることであろう。
(西山精一 東京都・会社役員)

■私の一年の行事

10代の少年だった私が、はじめて聴いたメサイアでうけた感動は、30年たった今でも忘れることができない。木枯しが吹く年の瀬になって、ことしもメサイアが聴ける喜びを思うとき、世代が変わり、すでに3児の親となったけれど、なお続けて聴こうと思う感激は一生の宝だと信じております。

メサイアを聴き、クリスマスを祝い、新しい年への期待を持たせてくれるこの音楽会が、私の欠かせない一年の行事になっております。また、演奏会の収益が、施設の子どもたちや、からだの不自由な人びとの福祉にあてられるということも、まことに意義深いことです。このすばらしい愛のメサイアを与えてくれる東京芸大の努力に感謝し、いつまでも続くことを祈ります。
(広瀬辰雄 東京都・会社員)

第31回

昭和56年12月14日(月) 上野・東京文化会館大ホール

指揮……………カール・デュンテ
ソプラノ……佐竹由美 アルト……河野典子
テノール……山内廣文 バス……河野克典
(トランペット 丸山研也)

第32回

昭和57年12月20日(月) 上野・東京文化会館大ホール

指揮……………マルティン・メルツァー

ソプラノ……伊古田 弥子 アルト……岡田 理恵子
テノール……枝川 一也 バス……小島 聖史
(トランペット 福田 善亮)

第32回ヘンデル「メサイア」演奏にあたり

社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団の主催で、毎年十二月に開かれる慈善音楽会に、東京芸術大学音楽学部は、ヘンデルのメサイアを演奏して、今回で三十二回になりました。半世紀連続演奏と云うことで始められたこの音楽会を、音楽学部では、これからもぜひ続けたいと思っております。

ヘンデルはこの曲を一七四一年に作曲し、一七四二年四月十三日、アイルランドのダブリンの音楽堂で、慈善音楽会として初演されました。本学も作曲者ヘンデルの、音楽によって、人々を慰め力づけようとの精神に則り、慈善演奏会として、教職員、学生一同は快く協力出演し、主催者はその収益を、すべて社会事業に寄せています。

幸いに演奏も年とともに充実し、聴衆の方々の深いご理解のもとに、毎年、の演奏会は、厳粛にして、いつも盛会のうちに終始することが出来ますことは、本公演にたずさわる者としてこの上ない感激と喜びを感じるものであります。

昭和五十七年十二月二十日

東京芸術大学音楽学部長 渡辺 高之助

[原資料縦組]

第33回

昭和58年12月19日(月) 上野・東京文化会館大ホール

指揮……………渡邊 暁雄
ソプラノ……大川 敦子 アルト……西川 裕子
テノール……若井 健司 バス……今村 雅彦
(トランペット 平田 昇)

第34回

昭和59年12月24日(月) 上野・東京文化会館大ホール

指揮……………ヴィクター・フェルドブリル
 ソプラノ……岩 切 美 夏 アルト……池 田 ひろみ
 テノール……市 川 和 彦 パ ス……村 澤 健 一
 (トランペット 佐 藤 宗 男)

第35回

昭和60年12月18日(水) 上野・東京文化会館大ホール

指揮……………佐 藤 功太郎
 ソプラノ……正 木 裕 子 アルト……岩 本 喜 子
 テノール……中 村 弘 人 パ ス……佐 野 正 一
 (トランペット 島 田 俊 雄)

第36回

昭和61年12月16日(火) 日 比 谷 公 会 堂

指揮〈チェンバロ〉……………小 林 道 夫
 ソプラノ……阿 部 葉 子 アルト……栗 林 朋 子
 テノール……成 田 英 文 パ ス……野 本 立 人
 (トランペット 島 田 俊 雄)

第36回ヘンデル「メサイア」演奏にあたり

今年も東京芸術大学音楽学部が出演するヘンデルの「メサイア」が演奏されることになりました。半世紀連続演奏を目標に始められたこの演奏会が、はや三十六回を迎えるとあって、感慨深い思いが致します。

第一回の昭和二十六年は、まだ終戦直後の焼け野原が、あちらこちらに

面影をとどめている頃でした。東京にも、日比谷公会堂以外、ホールらしいホールはありませんでした。今では、全国のいたるところに、立派なホールが建っています。世の中の有り様も、誰ひとり予測できなかったほど変わりました。しかし、「メサイア」を半世紀という「意志」と「こころ」は変わることなく、社会福祉のための灯火として受け継がれていました。作曲家ヘンデル自身が、終生この曲を、慈善の目的以外には演奏しなかったという事実が、私たちを勇気づけています。

幸いに演奏も年とともに充実し、本年は宗教音楽に造詣の深い小林道夫氏が指揮をとります。聴衆の方々の温かいご理解のうちに、今回の演奏が盛会のうちに終始することができるならば、東京芸術大学の関係者一同、この上ない喜びであります。

昭和六十一年十二月十六日

東京芸術大学音楽学部長 服 部 幸 三

〔原資料縦組〕

第37回

昭和62年12月15日(火) 上野・東京文化会館

指揮〈チェンバロ〉……………小 林 道 夫
 ソプラノ……天 羽 明 恵 アルト……芝 江 勢 津 子
 テノール……久 住 庄 一 郎 パ ス……鴨 川 太 郎
 (トランペット 島 田 俊 雄)